

狹江古墳群と高句麗系渡来人

——多氷屯倉との關係をめぐって——

鈴木正信

はじめに

安閑元年（五三四）に發生した武蔵国造の乱^①は、大和王権の地方支配制度である国造制・屯倉制^②が東日本へ実施される重要な契機となった。この争乱によつて、武蔵国埼玉郡を本拠とする笠原直氏が初代の武蔵国造に任命されるとともに、横滄・橘花・多氷・倉櫛の四処の屯倉が設置された。この争乱について、筆者は別稿^④で、横滄屯倉はのちの横見郡、橘花屯倉は橘樹郡、倉櫛屯倉は久良郡に対応し、それぞれ旧入間川水系^⑥、鶴見川水系と多摩川水系下流域、大岡川・帷子川水系を掌握する役割を担つたと見られることを論じた。

一方、多氷屯倉の「多氷」とは「多水」（多摩川）を意味し、多氷屯倉とは多摩川水系の上・中流域の河川交通と、東海道・東山道につながる陸上交通とを掌握するために設置されたこ

と、その中心施設はのちに武蔵国府や多摩郡家が置かれた現在の府中地域に所在したと見られること、それに加えて多摩川流域には複数の拠点（出先機関）が設けられ、そのうちの 하나가多摩郡⁷狛江郷⁸にも置かれており、この地域の高句麗系渡来人が屯倉の経営に従事した可能性がある⁹。あることなどを指摘した。

周知の通り、狛江郷域には東京都下でも有数の群集墳である狛江古墳群が展開しており、昭和二十年代に高句麗に關係する遺物が出土したことから、これを渡来人の墓とする説が提唱された。しかし、先行研究の中にはこうした見方に対して否定的なものもあり、必ずしも評価が定まっているとは言いがたい。そこで本稿では、近年の発掘調査と古代の文献史料に見られる「狛」の文字の用例を手がかりに、狛江郷と高句麗系渡来人の關係について改めて検討を行いたい。

〔1〕狛江古墳群の現状

狛江古墳群は、多摩川によって形成された立川段丘面の南東端に位置している（図1）。多摩川の流れが段丘面におつかつて南へ流れを変える地点であり、現地に立つてみると、多摩川を舟で往来する人々の目を強く意識した立地であることがよく分かる。その存在は早くから知られており、江戸時代の『武蔵名勝図会』¹⁰、『新編武蔵風土記稿』¹¹、『江戸名所図会』¹²などでも言

しが、大分発掘して今は其の影少なし。而れども現に東京府下に於ける唯一の古墳群なりと称せらる。

とあるように、かつては「狛江百塚」とも呼ばれていた。その後、昭和三十五年（一九六〇）・同五十一年（一九七六）に分布調査が行われ、現在は総数六〇〜七〇基と推定されている。⁽¹⁵⁾ただし、後述する弁財天池1〜3号墳や宿屋敷西1号墳など、近年になって新たに発見される古墳も多く、「百」という数字はあながち誇張とは言い切れないようである。

この古墳群は、地形によつて岩戸支群・和泉支群・猪方支群に分類される。古墳群のほぼ中央を南へ流れる旧野川を挟んで東側（岩戸面）に岩戸支群が所在し、西側（和泉面）は弁財天池から湧水して東へ流れる旧清水川を挟んで、北側が和泉支群、南側が猪方支群に分かれる。各支群は径三〇〜四〇m級の円墳と、径一〇〜二〇m級の円墳で構成され、ブリッジ（周溝の一箇所を陸橋として掘り残した部分）を持つ古墳が多いことが特徴とされる。はじめに、現存する一三基について簡単に概観しておく。⁽¹⁶⁾

岩戸支群

・土屋塚古墳（駄倉明神塚古墳） 径三五・二m、高さ四・四mの円墳である。墳丘の東側に小規模な造出を持ち、その外側に幅一〇・三mの周溝が巡る。周溝からは円筒埴輪六三個体以上、朝顔型円筒埴輪三〇個体以上が出土した。墳丘・墳端に並べられていた埴輪が、

周溝に転落したものと見られる。製作技法には上野・下野の影響が指摘されている¹⁷⁾。試掘調査とレーダー調査により、粘土槨に木棺を据えたものと木棺直葬の計2基が確認された。出土遺物から、五世紀中葉（第3四半期の早い段階）の築造と推定される。

・**橋北塚古墳**（三角塚古墳） 本来は径二六mの円墳であった。外径約四〇m、内径約二八m、幅約五mの周溝が巡る。六世紀前半の築造と推定される。

和泉支群

・**駄倉塚古墳** 本来は径四〇m以上、高さ四m前後の円墳であった。築造年代は不明とされてきたが、平成五年（一九九三）の発掘調査で円筒埴輪が出土し、その年代から五世紀前半（第2四半期頃）の築造と推定される。

・**東塚古墳** 径三五m、高さ五mの円墳。外径約六〇m、内径約四一m、幅九mの周溝が巡る。墳頂付近にテラスが確認でき、二段築成の可能性がある。周溝から円筒埴輪が出土し、その年代から五世紀後半（第3四半期）の築造と推定される。

・**松原東稻荷塚古墳** 本来は径三〇m級の円墳であったとされるが、東側に張り出しが見られることから帆立貝形古墳か、あるいは造出付円墳の可能性がある。円筒埴輪が採取されており、その年代から六世紀前半の築造と推定される。西側の墳丘断面には礫槨が露出し、二段逆刺形の鉄鍬が採取されている。

・**白井塚古墳** 本来は径約三六m、高さ約四mの円墳であった。墳丘の周りに幅二mのテラスがあり、その外側に幅一〇m、深さ一mの周溝が巡る。墳丘からは三基の礫槨が並んだ状態で検出され、木棺の底面と側面が河原石で覆われていた。こうした特徴は多摩川流域には少なく、北関東に由来するとされる。鉄製直刀、鉄鏃などが出土した。築造年代は五世紀後半から六世紀前半と推定される。

・**兜塚古墳** 径三六m、高さ五mの円墳。墳丘の外側に幅約一mのテラスがあり、その外側に内径五〇m、外径七〇m、幅一一m、深さ〇・七mの周溝が巡る。墳丘の南東側に小規模な造出をとまう可能性がある。周溝から円筒埴輪や朝顔形円筒埴輪が出土し、その年代から六世紀前半（第1〜第2四半期）の築造と推定される。

・**経塚古墳** 本来は径四〇〜四二m、高さ約五mの円墳であった。幅一一〜一四m、深さ一・五mの周溝の一部が検出されている。築造年代は六世紀初頭と推定される。中世には塚として利用されていた。『新編武蔵風土記稿』『江戸名所図絵』に当時の様子が描かれている。

・**飯田塚古墳** 径二〇m級の円墳と想定されている。

猪方支群

・**亀塚古墳** 狛江古墳群の中で最も早く、昭和二十六年（一九五二）に発掘調査が実施された。最大長四一m、後円部径三四m、高さ七mの帆立貝形古墳。幅九mの周溝が巡り、北

側にブリッジを持つ。後円部から二基の木炭槨、前方部から一基の箱形石棺が検出された。二基の木炭槨のうち、上部のものからは金銅製毛彫金具、直刀、銀環、刀子、鉄鏃、下部のものからは尚方作神人歌舞画像鏡・鈴釧・碧玉製管玉・ガラス小玉、槨外からは直刀・刀子・馬具類・鉄鏃・金銅製鋌、周溝からは円筒埴輪・人物埴輪・馬形埴輪が出土した。築造年代は五世紀末と推定される。墳丘は調査後に破壊を受け、現在は前方部の一部が残るのみである。『武蔵名勝図会』『新編武蔵風土記稿』に当時の様子が描かれている。

・**前原塚古墳** 本来は径二〇mほどの円墳であった。その後を実施されたレーダー調査では、内径二三・五m、外径三一・五mの周溝が巡り、南側にブリッジを持つことが確認され、墳頂部には堅穴系の埋葬施設が二基存在する可能性が指摘されている。

・**清水塚1号墳** 本来は径二〇m、高さ三mの円墳であった。墳丘南側に凝灰岩の石材が露出しており、横穴式石室の可能性が指定されている。周辺に存在した径一四mほどの墳丘が2号墳、高さ二mほどの起伏が3号墳とされたが、すでに削平されている。

・**猪方小川塚古墳** 昭和三十五年の分布調査で横穴式石室を持つ可能性が指摘されていたが、平成二十三年(二〇一一)の発掘調査により、狛江古墳群で初めて横穴式石室が確認された。本来は径一五mの円墳であり、周溝の内径は二一m、外径三〇mであったと想定される。石室は、泥岩の切石切組積みで構築された複室構造の横穴式石室で、前門から奥壁ま

では四・九m。ほぼ真西に向けて開口し、石室前にブリッジを持つ。玄室は、長さ二・七m、奥壁の幅一・三六m、玄門部の幅一・一四m、壁面は高さ一・二m。前室は長さ一・八m、最大幅一・一m。石室構築の基準に唐尺が採用された可能性が高いことから、七世紀半ば（第2四半期）の築造と推定される。石室内からは四四点の金属製品（金銅製耳環、鉄鏃、刀子、鉄鏃の一部と見られる棒状鉄製品）、須恵器片一八点（うち一三点は大甕の同一個体）が出土した。

以上、狛江古墳群の現状を簡単に整理した。調査が限定的で、築造年代が不明の古墳が多かった時期には、この古墳群は五世紀半ばから六世紀半ばまでの短期間に築造された「初期群集墳」と呼称され、一般的な群集墳とは異なる点が強調された。しかし、駄倉塚古墳・猪方小川塚古墳の調査や、昭和六十二年（一九八七）に始まった古屋敷塚古墳¹⁸の調査などにより、五世紀前半（第2四半期）から七世紀半ば（第2四半期）までの年代幅を持って築造されたことが明らかとなった（表1）。これにより「初期群集墳」という捉え方は見直されており、現在では多摩川中・下流域に位置するほかの古墳群との関係から説明がなされている。

すなわち、多摩川下流域では四世紀代になると扇塚古墳（前方後円墳あるいは前方後方墳、全長四〇m、四世紀前半）を皮切りに、宝葉山古墳（前方後円墳、全長九七m、四世紀半ば）や、亀甲山古墳（前方後円墳、全長一〇七m、四世紀後半）といった大型の前方後円墳を擁す

狛江古墳群と高句麗系渡来人

世紀	年代	狛江			砦			野毛		田園調布
		和泉	岩戸	猪方	砦中学校	喜多見	その他	上野毛・下野毛	等々力・尾山台	
4	300									■ 扇塚
	350									● 宝葉山 ● 亀甲山 ● 西岡 31
5	400				● 7			● 上野毛 ● 稲荷塚		
	450	● 駄倉塚 ● 弁財天池 1 ● 白井塚 ● 東塚 ● 塚塚	● 古里敷塚 ● 土屋塚	● 東和泉 8	● 4 ● 3	● 障屋 4	● 下山 1 ● 下山 2	● 野毛大塚 ● 天慶塚 ● 八幡塚 ● 御岳山 ● 狐塚		● 西岡 32 ● 丸山 ● 赤坂
6	500	● 松原東稲荷塚 ● 納山塚 ● 兜塚	● 横北塚	● 亀塚 ● 東和泉 6 ● 東和泉 2 ● 東和泉 4 ● 前原塚	● 8	● 第六天塚 ● 慶元寺 1 ● 障屋 6		● 野毛 9 ● 野毛 3 ● 野毛 2 ● スクモ塚	● 尾山北原塚 ● 等々力根 1	● 浅間神社 ● 西岡 28 ● 多摩川台 2 ● 観音塚
	550			● 諏訪塚?		● 障屋 5 ○ (慶元寺) 3 ● 障屋 2 ● 喜多見 ○ 稲荷塚 ○ 宮之原 1 ○ 障屋 14 ○ 障屋 3	● 野毛 4 ● 野毛 6		● 庵谷 ● 多摩川台 1	
7	600				○ 6	○ 殿山 1 ○ 殿山 2 ○ 大蔵 1			○ 多摩川台 3 ○ 多摩川台 8 ○ 浅間塚	
	650			○ 猪方小川塚						
	700									

● 竪穴系埋葬施設＝木炭柳・粘土柳・木棺 ● 竪穴系埋葬施設＝磯柳 ○ 横穴式石室

表 1 狛江古墳群および多摩川中・下流域の古墳の変遷
※『猪方小川塚古墳と狛江古墳群』より転載

る田園調布古墳群（大田区）が造営された。その後は、いったん墳丘規模を縮小させながら、多摩川中流域にも古墳が造られるようになるが、五世紀代に入ると、それまで大型古墳が存在しなかつた野毛地域に、野毛大塚古墳（帆立貝形古墳、五世紀初め、全長八二m）が突如として登場し、つづいて天慶塚古墳（帆立貝形古墳あるいは造出付円墳、全長四六m、五世紀前半）、八幡塚古墳（造出付円墳、全長三三m、五世紀中頃）、

御岳山古墳（帆立貝形古墳、全長五四m、五世紀中頃）、狐塚古墳（造出付円墳、全長四〇m、五世紀後半）が継続して造られ、野毛古墳群（世田谷区）が形成された。この古墳群は、帆立貝形古墳あるいは造出付円墳の墳形を持つことが特徴であり、とくに野毛大塚古墳出土の武器・武具類や馬具類は畿内の河内で生産されたものと見られ、古市・百舌鳥古墳群との関連が指摘されている。

一方、狛江古墳群の中でも、亀塚古墳は帆立貝形古墳、土屋塚古墳・兜塚古墳は造出付円墳であり、松原東稲荷塚古墳も帆立貝形古墳か造出付円墳の可能性がある。このうち亀塚古墳は野毛大塚古墳と墳形が酷似し、約半分の大きさで造られている。また、土屋塚古墳から出土した朝顔型円筒埴輪には、野毛古墳群と共通する装飾的な横ハケ技法が確認される。これらことから、狛江古墳群は野毛古墳群の造墓活動と密接な関係を持ち、その影響を受けて五世紀前半に築造が開始されたと考えられている。この時期には多摩川中・下流域の広範囲で複数の古墳群が並行して形成され始めるが、その中でも狛江古墳群には比較的大きな墳丘規模を持つ古墳が集中しており、当該地域において重要な位置を占めていたことがうかがえる。⁽²⁰⁾

〔2〕 狛江古墳群の研究史

次に、狛江古墳群の築造集団に関する先行研究を整理したい。狛江地域と渡来人とを結びつ

ける言説は、すでに『狛江村誌』⁽²⁾などに見られたが、狛江古墳群を渡来人の墓であるとする明確な主張は、冒頭でも述べたとおり昭和二十六年に行われた亀塚古墳の発掘を受けて、この調査を主導した大場磐雄によって提起された⁽²⁾。亀塚古墳からは多くの遺物が出土したが、大場は渡来人との関係を示すものとして金銅製毛彫金具と尚方作神人歌舞画像鏡に注目した。

金銅製毛彫金具(図2)は、厚さ〇・三mmの薄い銅板に金箔を張り、鑿先でくさび形状に文様を付したもので、入子菱文の綾織の絹布に縫い付けられており、装身具の一種と推

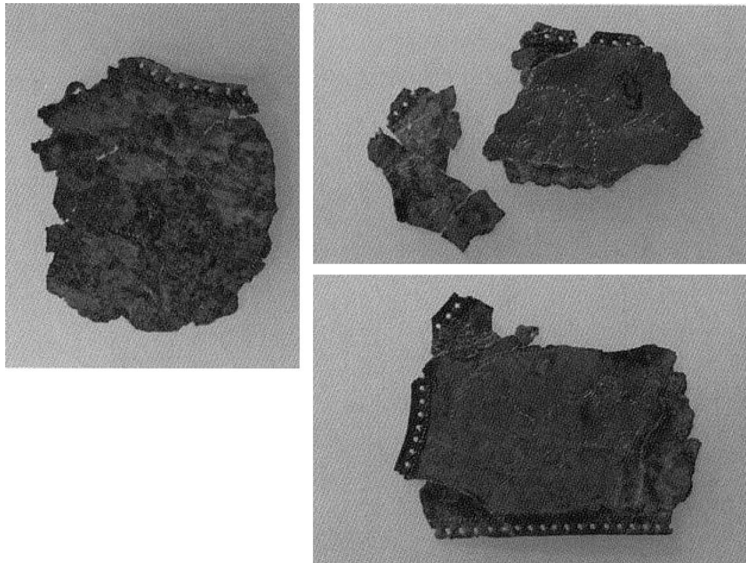


図2 亀塚古墳出土の金銅製毛彫金具
※『猪方小川塚古墳と狛江古墳群』より転載

定される。大場は、その文様に描かれた龍や麒麟などの凶像が、高句麗古墳群の江西大墓・中墓（朝鮮民主主義人民共和国平安南道南浦市江西区域三墓里）の壁画に相似していることを指摘した。

一方、尚方作神人歌舞画像鏡（図3）は、中国後漢時代の中頃に尚方工房で製作された白銅製の舶載鏡で、径二〇・八cmをはかる。同範鏡が畿内を中心に計一二面発見されているが、そのうちの二面は、沢田長持山古墳（大阪府藤井寺市沢田）と郡川西塚古墳（大阪府八尾市郡川）から出土した。前者は河内国大県郡巨麻郷の比定地（大阪府橿原市北東部一帯）に近接し、付近には大狗神社（柏原市本堂）が鎮座する。後者は同国若江郡巨麻郷の比定地（八尾市北部から東大阪市南部一帯）に所在し、やはり付近に許麻神社（八尾市久宝寺）が鎮座する。これらの「巨麻」「狗」「許麻」は、いずれも高麗（高句麗）に由来すると見られる。

また、『統日本後紀』承和十三年（八四六）



図3 亀塚古墳出土の尚方作神人歌舞画像鏡
※『猪方小川塚古墳と狗江古墳群』より転載

五月壬寅条には、

武蔵国言、多磨郡狛江郷戸主刑部直道継戸口、同姓真刀自咩、為^二同郷刑部広主妻^一、生^二四男三女^一。経^二廿一年^一、夫乃死矣。真刀自咩居^レ喪有^レ礼、事^レ死如^レ生。墳側結^レ廬、晨昏悲泣。推^二移歲月^一、終始不^レ渝。見^二其操行^一、可^レ謂^二節婦^一者。勅、宜特授^二位二階^一、兼終身免^二同戸田租^一。

とあり、武蔵国多磨郡狛江郷に刑部氏が居住していたことが知られる。これに対して、河内国若江郡にも刑部郷（八尾市刑部を遺称地名とし、同市中部一帯に比定される）が存在した。『新撰姓氏録』河内国諸蕃には、伊利斯沙礼斯の後裔を称する大狛連氏と、溢土福貴王の後裔を称する大狛連氏の二氏が掲載されているが（後掲）、これらはともに高句麗の人物の後裔を称し、その本拠は河内国若江郡巨麻郷と推定されている。²³

これらのことから大場は、狛江郷の刑部氏は河内国からこの地へ移住してきた氏族で、狛江古墳群は彼らの「一族の奥津城であり、亀塚の如きはその中での首領を葬った墳である」とした。また、狛江の地名は「狛（高麗）人の居住開拓によって付けられた郷名」であり、日本に到来した「高句麗人はその亡国以前からあったと見るべきで、狛江郷に來住した同国人もそのグループであった」とし、刑部氏がこの地へ移住してきた際に「高句麗人も共に移住した（或は刑部氏自身帰化人であったかもしれない）」と述べたのである。

この狛江古墳群を渡来人の墓とする説は、世間の耳目を大いに集めた。しかし、研究の進展にともない、次第に批判が出されるようになった。

甘粕健は、「大陸の様相の全面的な導入は五世紀後半以降の古墳文化の一般的な動向」であり、「副葬品の様相をもつて渡来系氏族の決定的な証拠にするのは困難」であるとし、「古墳群成立の基盤となったと思われる集落跡群は、弥生時代後期以来、継続的な発展」を示しており、「渡来集団説の積極的な根拠は乏しい」とした。つまり、大場が取り上げた金銅製毛彫金具や尚方作神人歌舞画像鏡などの遺物だけでは、渡来人がこの地に移住してきたことを示す根拠にはならないと主張した。そして、亀塚古墳が「墳丘の大きさに対してアンバランスとも言える優れた副葬品を有する」ことから、在地の共同体が「王権直属の軍事集団」に組織され、亀塚古墳の被葬者はその管掌者としての役割を与えられた「伴造的な地方首長」であり、古墳の副葬品は「騎乗の軍事指揮官を思わせる」とした。一方、大場が指摘した刑部氏の移住についてはこれを継承し、「狛江古墳群を造営した集団が、ヤマト政権に組織された軍事集団」であったとすれば、狛江の集団が「刑部を称していたことはあり得る」とし、「畿内の刑部氏の一部が移住し、在地の共同体を、新しい擬制的な同族集団に再編成する核になった」と論じた²⁴。

次に、十菱駿武は、「渡来系の畿内の首長が亀塚古墳や狛江古墳群の被葬者になった可能性」はあるとしながらも、「大陸・朝鮮製の優秀な金属製品が副葬されるのは、五世紀後半以降の

大型古墳に一般的な現象であり、渡来系氏族の古墳とする決定的な証拠とはしにくい」とし、「狛江の古墳群の時期と内容は不明確なものが多く、五世紀後半に突然畿内から軍事的な役割のある豪族が移住したとするには、亀塚に先行する古墳に在地色が強くあり、亀塚以降の古墳にも際だった差はないので、検討を要する」と述べ、甘粕と同様、渡来人との関係に否定的な見解を示した。また、「七〜八世紀に多磨郡狛江郷に高麗国からの渡来人が移住してきた可能性が認められるが、その文化的影響を全面的に評価することは慎重にすべきだろう」とし、「狛江や多摩川中流域のムラムラを統率していた首長が、畿内中央と親しい擬制的な同族関係になって、新しく集団関係を再編成した可能性が濃い」とした。⁽²⁵⁾

こうした中、昭和六十二年（一九八七）に弁財天池遺跡の発掘調査が行われ、三基の円墳（弁財天池1〜3号墳）と一基の方形周溝墓が検出された。このうち弁財天池1号墳は五世紀前半、方形周溝墓は弥生時代末期の築造であることが判明した。これを踏まえて對比地秀行は、弁財天池1号墳の発見はそれまで想定されてきた狛江古墳群の出現時期を半世紀ほど遡らせる結果となり、さらに「弥生末期の在地の共同体の盛行を示す大型方形周溝墓の発見」は、この古墳群の成立を「在地の共同体の発展の結果と考える根拠を示すもの」であるとし、「渡来人の日本への大量移住が考古学的に認められるのは五世紀後半以降であることや、五世紀代でのヤマト政権と高句麗の緊張関係は、少なくとも五世紀前半段階での高句麗系渡来人の狛江

地域への大量移住を肯定するものではありえない」として、狛江古墳群と渡来人との関係を否定した。そして、「亀塚古墳が築造された五世紀末頃から古墳群中でも比較的大型の兜塚古墳が築造されたと考えられる六世紀中頃に、大型古墳が集中する」ことは、「在地の共同体の軍事的再編成の現れ」である可能性が高いと述べた。²⁶⁾

以上、狛江古墳群の築造集団に関する先行研究を時系列に整理した。大きな流れとしては、渡来人説に対して相次いで批判が出されるところにも、中央からの刑部氏の移住についても疑問が呈され、むしろ在地の集団が王権と関係を形成したことで古墳群が築造されたとする見方に変わってきたと言える。²⁷⁾

〔3〕 狛江地域の高句麗系渡来人

前章までの整理を踏まえるならば、亀塚古墳出土の金銅製毛彫金具や尚方作神人歌舞画像鏡を根拠に、狛江古墳群が渡来人の墓であったと見ることは難しいであろう。また、現在では、氏姓制や部民制の成立は六世紀代以降とされており、²⁸⁾ 狛江古墳群の造営が開始された五世紀代には、刑部直という氏姓を名乗る伴造氏族や刑部という部民は未成立であったと見られる。これらの点からも、かつての渡来人説をそのまま首肯することはできない。

しかし、これまでの議論は、渡来人説が世間に与えたインパクトの大きさからか、「狛江古

墳群は渡来人の墓か否か」という命題にとらわれてきたように見受けられる。猪方小川塚古墳の調査を担当した宇佐美哲也は、「狛江古墳群は、築造の時期・背景が大きく異なる古墳群が重複して残されてきたものであり、今後は狛江古墳群としてひと括りにされてきたなかに、築造の時期や背景が異なる古墳群がどのようなかたちで重複しているのか、その実態を明らかにすることが、まずは課題となる」と述べており、²⁹⁾傾聴すべき指摘である。第一章でも述べたように、そもそも狛江地域にはすでに削平されたものも含め合計で七〇基以上の古墳が存在したと推定されており、それらは三つの支群に分かれ、さらに各支群は大型の円墳と中・小型の円墳で重層的に構成されている。これらを五世紀前半から七世紀半ばまでの長期間にわたり、単一の集団が独占的に造営し続けたとは想定し難い。³⁰⁾ 狛江古墳群を築造した集団の中には、大型円墳に葬られた首長層以外にも、その配下に属した複数の大小さまざまな集団がいたはずであり、そうした中に渡来系の人々が含まれていた可能性を改めて検討してみる必要がある。そこで、以下の三点に注目したい。

第一に、平成十二年(二〇〇〇)の発掘調査において、狛江古墳群(岩戸支群)の東に接する喜多見中通南遺跡(世田谷区喜多見)の住居跡から、朝鮮半島産と見られる鉄製の固定式環状鏡板付轡(鑣轡)(図4)が出土した。これは乗馬の際に馬の口にかませる馬具で、現状は錆び付いて曲がっているが、復元すると長さ二〇・五cmになる。³¹⁾ 全国で二〇例ほど確認されて



図4 喜多見中通南遺跡出土の鉄製固定式環状鏡板付轡
 ※『喜多見中通南遺跡』2より転載

いるが、この遺跡から出土したものは関東地方で最古の五世紀中葉の年代を示しており、この時期に多摩川中流域で馬匹生産が始まっていた可能性が指摘されている^②。これを踏まえて寺田良喜は、この喜多見中通南遺跡に居住していた人々は、近傍の土屋塚古墳を築造した母集団であり、彼らは「七世紀後半以降に本格化する」とされる朝鮮半島からの渡来人集団の東国移住の先駆け」であったとした。また、亀塚古墳には

「断続的に続いた狛江地域への移住者集団を統率する役割を担った、畿内王権に直属する官僚的な首長が埋葬された」と述べた。⁽³³⁾

第二に、平成二十年(二〇〇八)に行われた弁財天池遺跡の第一五次発掘調査において、常陸国新治郡の新治廃寺(茨城県筑西市)の瓦と同範の単弁十六葉蓮華文軒丸瓦(図5)が表土中から一点出土した。⁽³⁴⁾ 推定直径二〇cmで、赤褐色の堅緻な焼き上がりである。年代は八世紀後半と見られ、付近に奈良時代の寺院が存在したと推定される。『続日本紀』靈龜二年(七一六)五月辛卯条には、

以^一駿河・甲斐・相摸・上総・下総・常陸・下野七国高麗人千七百九十九人^一、遷^二于武藏国^一、始置^二高麗郡^一焉。

とあり、常陸国をはじめとする計七カ国に居住していた高句麗系渡来人一七九九人が武藏国へ移され、高麗郡が設置された。この高麗郡の郡



図5 弁財天池遺跡出土の単弁十六葉蓮華文軒丸瓦
※『府中市郷土の森博物館ブックレット27 古代たまの寺とみほとけ』(2025年)より転載

寺と見られる女影廃寺（埼玉県日高市）からも新治廃寺の同範瓦が出土しており、常陸国の渡来人が実際にこの地へ移住してきたことを伝えるものとされる。そして、同じ新治廃寺の同範瓦が弁財天池遺跡でも出土したことは、狛江地域にも高句麗からの渡来人が居住していたことをうかがわせる。³⁵ 武蔵国内では狛江地域からも高麗郡に移住した人々がいたか、あるいは各地の渡来人が高麗郡へ移住する際に狛江地域が中継地としての役割を果たした可能性が指摘されている。³⁶

第三に、平成三十年（二〇一八）に行われた宅地造成の事前調査で、宿屋敷西1号墳（狛江市岩戸北）が発見された。この古墳は径一三mをはかる小型の円墳で、立地から岩戸支群に含まれる。五世紀中葉（第3四半期）の築造と見られ、周溝から出土した鉄製品の中には、鉄斧や刀子などとともに鉄鐸（図6）が含まれていた。鉄鐸は鉄板を円錐形に丸めて鐸身とし、内部に舌を吊り下げて使用するもので、朝鮮半島由来の祭祀用具とされる。全国で一〇〇例ほどが出土しているが、西日本に集中しており、関東では倉賀野満福寺6号墳（群馬県高崎市）³⁷に続いて二例目となる。早野浩一は、鉄鐸は鍛冶道具や鉄滓などをともなって出土する例が多く、被葬者は「渡来系鍛冶工人」との関係がうかがえるとす。³⁸ 亀田修一も、渡来人が居住したことを示す手がかりになる遺物を二五種類に分類しており、その一つとして鉄鐸を挙げている。³⁹



図6 宿屋敷西1号墳出土の鉄鐮
※『新狛江市史普及版』より転載

これらの諸点からすれば、狛江地域には早くから渡来人が居住していたのではなからうか。彼らは馬匹生産や鍛冶生産に関与しており、そうした状況が背景にあつて、喜多見中通遺跡出土の固定式環状鏡板付轡や、宿屋敷西1号墳出土の鉄鐮がこの地にもたらされたと推察されるのである。宿屋敷西1号墳は石戸支群に含まれ、喜多見中通遺跡も岩戸支群の東に接していることからすると、渡来系の人々は狛江地域の中でも北西の岩戸支群付近に集住していたと見ることもできる。また、常陸国や武蔵国高麗郡との関係から、狛江地域の渡来人には高句麗に出自を持つ人々が多く含まれており、高麗郡設置以前から各地の高句麗系渡来人とネットワークを形成していたことがうかがえる。彼らは大型円墳に葬られたこの地域の首長層というよりも、

その配下に編成された集団を構成する人々であり、その知識や技術によって地域開発や古墳築造に従事したと考えておきたい。

〔4〕「狛」地名と高句麗系氏族

(1) 「狛」と「高麗」の通用

前章では、狛江地域に高句麗系渡来人が居住していた可能性を想定した。そこで次に、文献史料からこの点について考察してみたい。

狛江郷は、『和名類聚抄』高山寺本に「古万江」、東急本に「古乃江⁴⁰」、名博本に「コマヘ」との訓注があり、「こまえ」と訓まれたことが確認できる。高句麗人の居所という意味の「高麗居」にもとづくとする説や、高句麗人が住む入江の意味とする説などがある⁴¹。現在の狛江市駒井町【こまいまち】⁴²がその遺称地名とされるが、武蔵国国分寺瓦に「狛」の文字を押ししたものが⁴³あり、『続日本後紀』承和十三年五月壬寅条（前掲）にも「狛江郷」と見えるのに対して、「駒井」は永祿二年（一五五九）『小田原衆所領役帳』⁴⁴に「駒井本郷」「駒井宿河原」などと初見する。よって、先に「狛江」という表記があり、のちに「こまえ」の音に「駒井」の文字が当てられたと推測される⁴⁴。

注目されるのは、狛江郷の「狛」という文字である。古代の史料において「狛」は「高麗」

と通用されることがあり、その場合には朝鮮半島の高句麗の意味で用いられる。⁽⁴⁵⁾たとえば、『日本書紀』欽明七年（五四六）是歳条には、

高麗大乱。凡闕死者二千余。〈百濟本記云、高麗、以二月丙午、立中夫人子_レ為_レ王。年八歳。狛王有_三夫人_一。正夫人無_レ子。中夫人生_三世子_一。其舅氏麁群也。小夫人生_レ子。其舅氏細群也。及_三狛王疾篤_一、細群・麁群、各欲_レ立_三其夫人之子_一。故細群死者、二千余人也。〉

とあり、「高麗」（高句麗）のことを後段で「狛」と言い換えている。同様の例は『日本書紀』雄略二十年条にも見える。⁽⁴⁶⁾『日本書紀』欽明十四年（五五三）八月丁酉条には、

百濟、遣_二上部奈率科野新羅・下部固徳汶休带山等_一、上_レ表曰、（略）今年忽聞、新羅与_三狛国_一通_レ謀云、百濟与_三任那_一、類詣_三日本_一。意謂是乞_三軍兵_一、伐_三我国_一歟。事若実者、国之敗亡、可_二企踵而待_一。庶先日本軍兵、未_レ発之間、伐_三取安羅_一、絶_三日本路_一。（略）伏願、天慈速遣_三前軍・後軍_一、相統来救。（略）

とあり、ここでは百濟・新羅・任那・日本と並んで、高句麗の意味で「狛国」の表記が用いられている。欽明九年（五四八）六月壬戌条、⁽⁴⁷⁾欽明十一年（五五〇）四月乙未条、⁽⁴⁸⁾欽明十五年（五五四）十二月条などにも、同じく他国に対して高句麗を「狛」と表記する用法が確認できる。

また、『新撰姓氏録』には高句麗系の氏族が多く掲載されている。

右京諸蕃下 高麗

狛首 出_レ自_二高麗人安岡上王_一也。

山城国諸蕃 高麗

桑原史 出_レ自_二狛国人漢胸_一也。

狛造 出_レ自_二高麗国主夫連王_一也。

八坂造 出_レ自_二狛国人之留川麻乃意利佐_一也。

摂津国諸蕃 高麗

高安漢人 出_レ自_二狛国人小須須_一也。

河内国諸蕃 高麗

大狛連 出_レ自_二高麗国人伊礼斯沙札斯_一也。

大狛連 出_レ自_二高麗国^(入麻カ)溢士福貴王_一也。

未定雑姓 河内国

狛染部 高麗国須牟祁王之後也。

狛人 高麗国須牟祁王之後也。

このうち、狛首氏（右京諸蕃）、狛造氏（山城国諸蕃）、大狛連二氏（河内国諸蕃）、狛染部

氏・狛人氏（未定雜姓河内国）は、ウジナに「狛」を含み、高句麗に出自を持つ氏族である。一方、桑原史氏・八坂造氏（山城国諸蕃）、高安漢人氏（撰津国諸蕃）は、ウジナに「狛」の文字を含まないものの、やはり高句麗に出自を持ち、本系の文中で故国である高句麗のことを「狛」と表記している。このように、古代の史料では「狛」の文字を「高句麗（高麗）」の意味で用いていることが分かる。

（2）山城国相楽郡の大狛郷・下狛郷

さらに、「狛」を含む地名に、実際に高句麗系の氏族が居住していた例がある。まず、山城国相楽郡の大狛郷・下狛郷（図7・8）が挙げられる。大狛郷は、現在の京都府木津川市山城町上狛を遺称地名とし、この付近から同市山城町北河原にかけての一带に比定される。下狛郷は、現在の京都府相楽郡精華町下狛・狛田を遺称地名とし、この一带に比定される。両郷の範圍を「狛村⁽⁵⁰⁾」や「狛野⁽⁵¹⁾」と言うこともあった。この地は『行基年譜』に、

泉寺布施屋。〈在「相楽郡高麗里」〉。

とあるように「高麗里」とも表記され、『日本靈異記』中巻第十八「皆読法華経僧而現口喞斜得悪死報縁には、

去天平年中、山背国相楽郡部内、有「白衣」。姓名未詳也。同郡高麗寺僧栄常、常誦

持法華經¹。(略)

とあるように「高麗寺」⁽⁵²⁾が建立されていた。この山城国相楽郡には、『続日本紀』和銅四年(七二一)七月戊寅条に、

山背国相楽郡狛部宿禰奈売、一産^三男^一。賜^三繩^二疋、綿^二屯、布^四端、稻^二百束、乳母一人^一。

とあり、天平勝宝五年(七五三)六月十五日「智識優婆塞等貢進文」⁽⁵³⁾にも、

狛人黒麻呂。〈年十五。山城国相楽郡戸主狛人麻嶋戸口。〉

とあるように、狛部氏や狛人氏などウジナに「狛」を含む氏族が居住していた。『日本書紀』天武十年(六八一)四月庚戌条には、

錦織造小分、田井直吉麻呂、次田倉人楯足(楯、此云^三武矩^一)・石勝、川内直梟、忍海造鏡・荒田・能麻呂、大狛造百枝・足坏、倭直籠麻呂、門部直大嶋、穴人造老、山背狛鳥賊麻呂、并十四人、賜^レ姓曰^レ連。

とあり、この大狛造氏や山背狛氏の本拠は記されていないが、「山背狛」とあることから、やはり山背国相楽郡の氏族と見られる。『日本書紀』欽明二十六年(五六五)五月条には、

高麗人頭霧唎耶陞等投^二化於筑紫^一。置^二山背国^一。今畝原・奈羅・山村高麗人之先祖也。とあり、高句麗人の頭霧唎耶陞が投化して山背国へ遷され、畝原・奈羅・山村の高句麗人(高

麗人)の先祖になったとある。ここに見える山村は『新撰姓氏録』山城国皇別曰佐条に「山城国相楽郡山村曰佐」とあることから、山城国相楽郡内の地名であることが分かる。これらの氏族の本拠は、相楽郡の大狛郷・下狛郷と推測される。前掲した狛造氏(『新撰姓氏録』山城国諸蕃 高麗)も、頭霧唎耶陞の後裔とされる。さらに、『日本三代実録』貞観三年(八六一)八月十九日庚申条には、

左京人散位外従五位下伴大田宿祢常雄、賜「伴宿祢姓」。先是、正三位行中納言兼民部卿皇太后宮大夫伴宿祢善男等奏言、常雄款祢、謹稽「家諱」、伴大田宿祢同祖、金村大連公第三男狭手彦之後也。狭手彦、宣化天皇世、奉「使任那」。征「新羅」、復「任那」、兼助「百濟」。欽明天皇世、百濟以「高麗之寇」、遣「使乞」救。狭手彦復為「大將軍」、伐「高麗」。其王踰「城而遁」。乘「勝入」宮。尽得「珠寶・貨賂」、以獻「之」。磯城嶋天皇世、還來獻「高麗之囚」。今山城国狛人是也。(略)

とある。この記事に引かれた伴大田宿禰常雄の款状によれば、欽明朝に大伴連狭手彦が百濟を救援するため大將軍として派遣され、高句麗を討伐して多くの宝物を持ち帰り、帰国した際には高句麗人の捕虜を献上し、彼らが山城国の狛人の祖になったという。ほかにも『日本後紀』弘仁二年(八一二)八月己丑条には、

山城国人正六位上高麗人東部黑麻呂、賜「姓広宗連」。

とあり、高句麗に由来する氏姓である東部氏が、山城国に居住していたことが確認できる。これらの狛人氏や東部氏も、おそらくは相楽郡大狛郷・下狛郷に關係する氏族であろう。

(3) 紀伊国那賀郡山崎郷狛村

次に、紀伊国那賀郡山崎郷狛村(図7・9)が挙げられる。⁽⁵⁵⁾山崎郷は現在の和歌山県岩出市山崎を遺称地名とし、この付近に比定される。中世には広く岩出市西部を占める形で山崎庄が存在し、この庄園の産土神であった山崎神社が現在も岩出市赤垣内に鎮座している。狛村は比定地不明であるが、この一帯に含まれると見て差し支えない。ここは紀ノ川南岸に位置し、南から流れてきた貴志川が紀ノ川と合流する河川交通の要衝に当たると見られる。⁽⁵⁶⁾

『続日本紀』神護景雲元年(七六七)六月庚子には、

紀伊国那賀郡大領外正六位上日置毘登弟弓、稻一万束献_二於当国分寺_一。授_二外従五位下_一。とあり、那賀郡大領として日置毘登氏が見える。大治元年(一一二六)「紀伊国石手莊文書相伝次第」⁽⁵⁷⁾にも、

荒川権大夫那賀郡司日置為世。(先祖相伝。)

とあり、那賀郡司として日置為世が見えることから、日置毘登氏は当郡の郡領氏族と推定されている。⁽⁵⁸⁾日置毘登氏はもと日置首の氏姓を称していたが、聖武天皇の諱である「首」を避

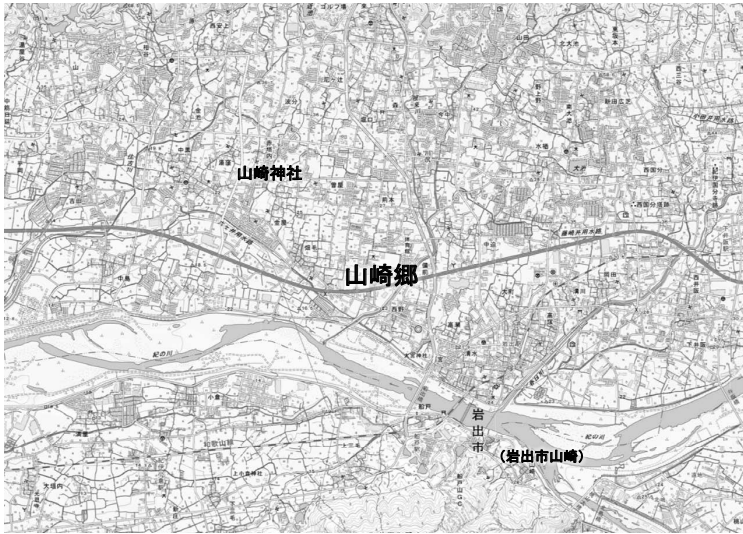


図9 紀伊国那賀郡山崎郷粕村周辺地図
 ※地理院地図電子国土 web 掲載地図を一部加工して作成

けるため、天平勝宝九年（七五七）に「首」姓から「毘登」姓へ改められた。この日置首氏・日置毘登氏の出自は不明であるが、天平十七年（七四五）九月二十一日「智識優婆塞等貢進文」に、

日置造石足（年十九。紀伊国那賀郡荒川郷戸主日置造白麻呂戸口。）

とあるように、同じ那賀郡の荒川郷に日置造氏が居住しており、おそらくは同族と見られる。荒川郷は現在の紀の川市のうち旧桃山町一帯に比定され、山崎郷とは貴志川の対岸に当たり近接している。日置造氏は『新撰姓氏録』に以下のように所載されている。

左京諸蕃下 高麗

日置造 出自高麗國人伊利須意彌也。

右京諸蕃下 高麗

日置造 出自高麗國人伊利須使主後。(一名伊和須。)

大和國諸蕃 高麗

日置造 出自高麗國人伊利須使主也。

摂津國諸蕃 高麗

日置造 鳥井宿禰同祖。伊利須使主之後也。

これらによれば、日置造氏はいずれも高麗人の伊利須意弥(伊利須使主)の後裔を称しており、紀伊国那賀郡荒川郷の日置造氏も同じく高麗に出自を持つ氏族と推定される。⁽⁶⁾ ちなみに、鳥井宿禰は『新撰姓氏録』大和國諸蕃 高麗に、

鳥井宿禰 日置造同祖。伊利須使主後。

とあり、ここでも日置造氏と同祖とされているが、『続日本紀』宝龜八年(七七七)四月甲申条には、

從六位上日置造雄三成等四人、鳥井宿禰。

とあり、改姓以前は日置造の氏姓を名乗っていたことが分かる。このように、紀伊国那賀郡荒

川郷には高句麗系の日置造氏がおり、これに近接する山崎郷狛村に分布した日置首氏・日置毘登氏もその同族で、高句麗に出自を持つ渡来系の人々であったと推定することができる。⁽⁶²⁾

(4) 大和国城上郡狛村

最後に、大和国城上郡狛村(図7・10)が挙げられる。『和名類聚抄』には辟田郷が所載されているが、『延喜式神名帳』大和国城上郡条には曳田神社が見え、現在の乗田神社(奈良県桜井市白河)を論社とすることから、辟田郷もこの一帯に比定されている。この一帯から初瀬川を挟んだ対岸には、中世から近世にかけて狛村が存在し、現在も大字に狛という地名が残る。この地はもと東岩坂村と呼ばれていたが、相楽郡大狛郷・下狛郷の豪族である狛山城守が永正四年(一五〇七)にこの地に入部したため、狛村に改名したと伝わる。

この地は、中央豪族の三輪君氏(大神朝臣氏)・三輪引田君氏(大神引田朝臣氏)の本拠地である城上郡大神郷や、この氏族が奉祭した大神神社と至近距離にある。⁽⁶³⁾三輪君氏は王権が主催した三輪山での祭祀を執行した氏族であるが、一方で対外交渉にも活躍を見せている。たとえば、『日本書紀』天智二年(六六三)三月条には、

遣^二前將軍上毛野君稚子・間人連大蓋、中將軍巨勢神前臣詔語・三輪君根麻呂、後將軍阿倍引田臣比羅夫・大宅臣鎌柄^一、率^二二万七千人^一、打^二新羅^一。



図10 大和国城上郡狛村周辺地図
※地理院地図電子国土 web 掲載地図を一部加工して作成

とあり、白村江の戦いの際、三輪君根麻呂が中將軍に任命されて出征している。同様に、三輪君氏は海外へ派遣された人物を多く輩出している。⁽⁶⁶⁾ また、三輪君氏が奉祭した大物主神は、『日本書紀』神功皇后撰政前紀（仲哀九年九月己卯条）に、

令^二諸国^一、集^二船舶^一練^二兵甲^一。
時軍卒難^レ集。皇后曰、必神心焉、
則立^二大三輪社^一、以奉^二刀矛^一矣。
軍衆自聚。

とあり、神功皇后が新羅に出兵しようとした際に軍卒が集まらなかったため、大物主神を祭る社を建立して刀・矛を奉納したところ、多くの兵士が集まったとあるように、対外交渉に靈験を示

す軍神（征討神）としての性質を有するとされている。⁶⁷ さらに、『新撰姓氏録』未定雑姓 和泉国には、

神人 高麗国人許利都之後也。

とあり、高麗国人の許利都の後裔を称する神人氏が所載されているが、これは三輪君氏の配下に編成された高句麗からの渡来系集団であると思われる。

一方、三輪引田氏からは、『日本書紀』天武十三年（六八四）五月戊寅条に、

三輪引田君難波麻呂為「大使」、桑原連人足為「小使」、遣「高麗」。

とあり、同十四年（六八五）九月癸亥条

遣「高麗国」使人等還之。

とあるように、三輪引田君難波麻呂が大使として高句麗（小高句麗⁶⁸）へ派遣され、約一年にわたって現地に滞在した後、高句麗の遺民を日本に引率した。⁶⁹ この時に到来した高句麗遺民の一部は、三輪君氏・三輪引田君氏の本拠地付近に集住したものと思われ、のち靈龜二年に武蔵守の任にあつた大神朝臣狛麻呂は、これらの高句麗遺民との関係を踏まえて、⁷⁰ 武蔵国高麗郡の設置に尽力したと見られる。⁷¹ このように、三輪君氏・三輪引田君氏の本拠地に近い狛地域には、古代から高句麗系の集団が居住していた可能性がある。

(5) 小結

以上、山城国相楽郡狛江郷・下狛郷、紀伊国那賀郡山崎郷狛江村、大和国城上郡狛江村の例を挙げたが、「狛江」の文字を地名に含むこれらの地域には、いずれも高句麗から渡来した集団が居住しており、そのことに因んで「狛江」が地名に付されたと考えられる。とすれば、多摩郡狛江郷の場合も同様に理解してよいのではなからうか。すなわち、高句麗系渡来人が居住していたことから、この地域が高句麗（高麗）を意味する「狛江」を冠して「狛江」と呼ばれるようになったと考えられるのである。したがって、大場が狛江の地名を「狛江（高麗）人の居住開拓によって付けられた郷名」とした点は、首肯すべきであると考えられる。

結語

本稿では、狛江地域および狛江古墳群と高句麗系渡来人との関係について考察を行ってきた。論旨を整理するならば、次の通りである。

・かつて狛江古墳群は、亀塚古墳から金銅製毛彫金具や尚方作神人歌舞画像鏡が出土したことから、高句麗系渡来人の墓であるとする説が広く知られていたが、その後、相次いで批判が出されており、現状ではこの渡来人説をそのまま首肯することはできない。

・しかし、喜多見中通遺跡から五世紀中葉の固定式環状鏡板付轡が出土したこと、同じく五

世紀中葉築造の宿屋敷西1号墳から鉄鐸が出土したことからすると、狛江地域には早くから渡来系の人々が入ってきており、彼らは馬匹生産や鍛冶生産に関与していた可能性がある。また、弁財天池遺跡で高麗郡の女影廃寺と共通する新治廃寺の同範鏡が出土したことから、彼らは高句麗に出自を持つ人々であり、靈龜二年の高麗郡設置以前から各地の高句麗系渡来人とネットワークを形成していたと考えられる。

・このことは、古代の文献において「狛」の文字が「高麗」と通用され、高句麗の意味で用いられていること、山城国相楽郡大狛郷・下狛郷、紀伊国那賀郡山崎郷狛村、大和国城上郡狛村などの「狛」の文字を含む地名に、実際に高句麗に出自を持つ渡来系の人々の居住が確認あるいは想定されることから裏付けられる。

・狛江地域に居住した高句麗系渡来人は、狛江古墳群の古墳に埋葬されることもあったかもしれないが、基本的には狛江地域の首長のもとに編成された集団を構成して、この地域の開発や古墳の築造などに活躍した人々であったと推定される。よって「狛江」という地名は、この地に高句麗系渡来人が集住していたことに由来すると考えられる。

以上を踏まえて、最後に狛江地域と多氷屯倉の関係について付言しておきたい。多氷屯倉の中心施設は、府中地域に置かれたと見られるが、それに加えて多摩郡内には狛江郷に刑部氏(73)が分布しており、隣接する橋樹郡橋樹郷にも刑部氏が確認できる。両氏族は連携しつ

つ、近隣の刑部からの物資貢納や労役徴発を担当していたとの指摘がある。⁽⁷⁵⁾ 同様に多摩川上流域の多摩郡鴨里（あきる野市乙津）には吉士が居住していたのに対し、やはり橘樹郡に飛鳥部吉士が確認でき、この両氏族も同じ吉士集団として連携していたと見られる。⁽⁷⁶⁾ このように多摩川流域には複数の拠点（出先機関）が存在し、これらの氏族が隣接する橘樹郡にも及ぶ交通・流通のネットワークを形成することで、多氷屯倉は支配・貢納拠点としての機能を果たしていたと考えられる。

一方、『日本書紀』欽明十七年（五五六）十月条には、

遣_二蘇我大臣稻目宿禰等_一、於_二倭国高市郡_一置_二韓人大身狭屯倉_一言韓人者、百濟也。、高麗人小身狭屯倉_一。紀国、置_二海部屯倉_一。〈一本云、以_二処々韓人_一為_二大身狭屯倉・田部_一。

高麗人為_二小身狭屯倉・田部_一。是即以_二韓人・高麗人_一為_二田部_一。故因為_二屯倉之号_一也。〉とあり、大和国高市郡に小身狭屯倉が設置され、高麗人をその田部としたという。この記事から、高句麗系渡来人も六世紀中葉から屯倉の経営に従事する場合のあったことが知られる。

また、『延喜式神名帳』武蔵国多摩郡条には、虎柏神社が所載されている。この神社は、現在の虎柏神社（調布市佐須町）、および虎柏神社⁽⁷⁸⁾（青梅市根ヶ布）を論社とし、ほかにも虎柏神社（稲城市東長沼）が確認できる。「虎柏」とは「虎豹」を誤写したもので、本来は「虎豹神社」⁽⁸⁰⁾、あるいは「虎豹神社」⁽⁸¹⁾を称しており、高句麗系渡来人が故国の神を祭ったことに始ま

ると伝えられる^⑧。これら三社はいずれも多摩川やその支流沿いに鎮座しており、その所在地には高句麗系渡来人が居住していたと推定される。つまり、多水屯倉が管掌した多摩川上・中流域には、複数の地点に高句麗系渡来人の分布が想定されるのであり、本稿で取り上げた粕江地域の高句麗系渡来人も、彼らと連携しながら多水屯倉経営の一翼を担ったと考えられる。

(1) 『日本書紀』安閑元年閏十二月是月条に、「武蔵国造筭原直使主与「同族小杵」、相「争国造」。使主・小杵、皆名也。経年難決也。小杵、性阻有逆、心高無順。密就求「援於上毛野君小熊」、而謀「殺使主」。使主、覚之走出、詣「京言」状。朝廷臨断、以「使主」為「国造」、而誅「小杵」。国造使主、悚懣交「懷」、不「能」默已」。謹為「国家」奉「置」横滄・橋花・多水・倉櫟四処屯倉」とある。

(2) 「屯倉」の用字は多様であるが、本稿は字義を問題とするわけではないため、原則として出典の表記にしたがい、総称する場合は便宜的に「屯倉」とする。屯倉の実態・機能に関しては膨大な研究史があるが、ここでは広い意味で、土地所有や農業経営に留まらない多様な機能を持つ王権の支配・貢納拠点と理解しておく。

(3) 吉田晶「国造本紀における国造名」(『日本古代国家成立史論』東京大学出版会、一九七三年、初出一九七一年)。

(4) 拙稿「国造の氏姓と「クニの名」」(『日本古代の氏族と系譜伝承』吉川弘文館、二〇一七年)、同「武蔵国造と物部直氏」(『日本古代の国造と地域支配』八木書店、二〇一三年、初出二〇一八年)、同「武蔵国造の乱と横滄屯倉」(『日本古代の国造と地域支配』前掲、初出二〇二〇年)、同「武蔵国造の乱の再検討」(『歴史評論』八九五、二〇二四年)、同「安閑朝における屯倉設置の史実性」(篠川賢・大川原

- 竜一・鈴木正信編『国造制・屯倉制の研究』八木書店、二〇二六年）、同「武蔵の屯倉と渡来人―多水屯倉を中心に―」（高麗浪漫学会編『古代韓半島と東国』高志書院、二〇二六年四月刊行予定）。
- (5) 古代の郡域は、埼玉県吉見町を中心に、南は川島町の大半を占め、坂戸市・川越市・東松山市・熊谷市・鴻巣市・北本市の一部にまで広がっていた。
- (6) 現在の入間川水系は荒川水系に属しているが、寛永六年（一六二九年）に荒川の瀬替え（荒川の流路を熊谷市久下付近で締め切り、入間川水系の和田吉野川に付け替える工事）が実施される以前は、荒川は現在の元荒川筋を主流としており、入間川水系は独立していた。以下、旧入間川水系と呼称する。
- (7) 「多磨郡」「多麻郡」「多波郡」なども表記するが、本稿では通例にしたがい「多磨郡」とする。
- (8) 以下では煩を避けるため、七世紀以前についても「狍江郷」との表現を用いることとする。また、狍江郷の範囲は現在の狍江市域を中心に、調布市東部や世田谷区南西端部にも及んでいたと推定される。『角川日本地名大辞典一三 東京都』（角川書店、一九七八年）、江口桂「郡・郷の領域と国府」（『古代武蔵国府の成立と展開』同成社、二〇一四年）、狍江市市史編集専門委員会編『新狍江市史』（二〇二二年）、同編『新狍江市史普及版』（二〇二三年）など。
- (9) 「渡来人」については古くから議論があり、「帰化人」の語を用いるべきとする意見もあるが、ここでは中華思想にもとづく政治的イデオロギーや、日本列島に移住・定住したか否かという観点はひとまず措くこととし、日本列島にやって来たという広い意味で、現在定着している「渡来人」あるいは「渡来系」の語を用いることとする。田中史生『渡来人と帰化人』（KADOKAWA、二〇一九年）、吉村武彦・吉川真司・川尻秋生編『渡来系移住民』（岩波書店、二〇二〇年）、中野高行『渡来人』（新古代史の会編『テーマで学ぶ日本古代史』社会・史料編、吉川弘文館、二〇二〇年）など参照。
- (10) 文政六年（一八二二）成立。植田孟緒著。

- (11) 文政十一年(一八二八)成立。林述斎総裁、間宮士信・三島政行ら編。
- (12) 文政一二年(一八二九)成立。斎藤幸雄・幸孝・幸成編。
- (13) 狛江市史編さん委員会編『狛江市史』(一九八五年)九三頁。
- (14) 石井扇吉編『狛江村誌』(狛江村役場、一九三五年)二頁。狛江市教育委員会編『狛江市文化財調査報告書七 狛江市の民俗二』(一九八六年)所収。
- (15) 多摩地区所在古墳確認調査団編『多摩地区所在古墳確認調査報告書』(一九九五年)など。
- (16) 以下、各古墳の詳細は、狛江市教育委員会編『狛江市文化財調査報告書二 狛江市の古墳一』(一九七九年)、『狛江市史』(前掲)、狛江市教育委員会編『狛江市文化財調査報告書九 狛江市の古墳二』(一九八九年)、同編『弁財天池遺跡』(一九九二年)、『多摩地区所在古墳確認調査報告書』(前掲)、狛江市教育委員会編『狛江市文化財調査報告書二二 土屋塚古墳発掘調査報告書』(二〇〇六年)、同編『狛江市文化財調査報告書二八 狛江古墳群猪方小川塚古墳発掘調査報告書』(二〇一三年)、同編『猪方小川塚古墳と狛江古墳群』(二〇一四年)、『新狛江市史』(前掲)、『新狛江市史普及版』(前掲)などによる。情報は可能な限り新しいものによった。以下では、自治体史名・報告書名は適宜略記する。
- (17) 円筒埴輪は帯状の粘土を積み上げた後に、それを指でつなぎ合わせ、内面を調整せずに焼成しており、こうした特徴は上野・下野の古墳に見られるものであるが、現時点では下野と南武蔵を直接的に結びつける要素がないことから、上野の工人集団によって製作されたと考えられている。また、埴輪の胎土は近隣で出土する土師器や野毛大塚古墳出土の埴輪と同じであることから、上野の工人集団が派遣されたか移住してきて、古墳群の付近で埴輪を製作したとされる。『土屋塚古墳発掘調査報告書』(前掲)、『新狛江市史普及版』(前掲)。
- (18) 岩戸支群に属する。昭和三十五年の調査後、完全に削平されて所在地不明となっていたが、昭和

六十二年（一九八七）から開始された小田急線高架複々線工事にもなう発掘調査により、周溝の一部が検出され、本来は径三八m、高さ五mの円墳であったことが判明した。周溝は内径三九m、外径五二mで、北西側に幅五mのブリッジを持つ。ブリッジ脇の周溝から小型埴・壺などが出土し、その年代から五世紀前半（第2四半期）の築造と推定される。狛江古墳群の中で最も早くに築造された古墳と位置づけられる。現存しない。

(19) またこれまでは、狛江古墳郡は集落域と墓域が明確に分離せず、集落の中に古墳が点在する「分散型群集墳」とされてきたが、昭和六十二年の調査で東和泉1〜9号墳や弁財天池1〜3号墳が検出され、一部には大型古墳の周りに中・小型の古墳が密集する「密集型群集墳」が形成されていた場所もあったことが指摘されている。

(20) 松崎元樹も、狛江古墳群には墳丘径三〇m以上の古墳が一一基あり、うち五基が径四〇m前後であることから、同時期に狛江古墳群と近接した地域に出現する下布田古墳群・飛田給古墳群（調布市）、白糸台古墳群・高倉古墳群・御嶽塚古墳群（府中市）などに対する狛江古墳群の優位性がうかがえるとする。松崎元樹「群集墳の本質と被葬者像」（広瀬和雄ほか編『東国の群集墳』雄山閣、二〇二五年）。

(21) 『狛江村誌』（前掲）一頁には、「応神天皇十四年、百済の国王酒王、高麗・百済の賊伯、伯周の人を率ひて帰化し、此処に住居し、伯の里と称せしが其の起源にひて、多磨の入江の巨江に臨みたるに依り、狛江と命名せしものにして、天曆になれる「和名類聚抄」に狛江郷とあり」とある。これによれば、百済国王の酒君なる人物が高句麗・百済の賊伯や伯周の人々を引き連れて日本に到来し、この地に居住して「伯の里」と称し、多磨川の入江であることから「狛江」という地名が生じたという。しかし、そもそも「百済の国王」の居地を「伯の里」と称したというのも辻褄が合わない。「酒君」なる人物は『日本書紀』や『新撰姓氏録』に類似した人名が見えるが、年代や身分などが異なっている。『日

本書紀」仁徳四十一年三月条・同四十三年九月条には、紀角宿禰が百済に派遣された際、「百済王之族酒君」が無礼を働いたため、葛城襲津彦によって日本へ連行されたが、のちに罪を許されて鷹の飼育を命じられたとある。また『新撰姓氏録』では、刑部(右京諸蕃下)・百済公(和泉国諸蕃)が「百済国酒王」、六人部連(和泉国諸蕃)が「酒王」の後裔を称している。『狛江村誌』の所伝は、こうした『日本書紀』『新撰姓氏録』の記事を下敷きに、後世の人々が創作したものと推測される。

(22) 大場磐雄「多摩古代文化と帰化人」(『西郊文化』六、一九五三年) 八〇九頁。

(23) 佐伯有清『新撰姓氏録の研究』考証編五(吉川弘文館、一九八三年) 四七八・四七九頁。なお、伊里斯沙礼斯と湓土福貴王は他に見えない。

(24) 甘粕健「狛江古墳群の構造と特質」(『狛江市の古墳』前掲)。同「考古学への招待」(佐々木潤之介ほか編『新編日本史研究入門』東京大学出版会、一九八二年)も参照。

(25) 十菱駿武「狛江古墳群の歴史的性格」(『狛江市史』前掲)。

(26) 對比地秀行「弁財天池遺跡と狛江古墳群」(『弁財天池遺跡』前掲)。

(27) 狛江市のホームページでも、狛江古墳群と渡来人との関係を想定する「これまでの学説は覆された」とし、弁財天池遺跡の発掘により「狛江古墳群の出現時期は、これまで考えられていたより約半世紀ほど古いことが判明し、さらに古い弥生時代末の豪族の存在も明らかになった。畿内地方においても一般に渡来人移住の痕跡が認められるようになるのは、五世紀末と考えられるため、狛江古墳群出現時期に東国のこの地に渡来人が来たことは考えにくく、まして古墳群を造営した可能性は皆無に等しいわけである」との見方が紹介されている。狛江市ホームページ「太古のロマン、狛江古墳群の発掘」<https://www.city.komae.tokyo.jp/index.cfm/45,714,349,2102.html> 最終アクセス二〇二五年八月十四日。

(28) 近年のものとして、倉本一宏「大王の朝廷と推古朝」(大津透ほか編『岩波講座日本歴史』二、岩波

書店、二〇一四年）など。

(29) 宇佐美哲也「調査成果と課題」(『狛江古墳群猪方小川塚古墳発掘調査報告書』前掲) 四七頁。

(30) 宇佐美哲也は、六世紀前半(第1〜第2四半期)に兜塚古墳が築造されてから、七世紀半ば(第2四半期)に猪方小川塚古墳が築造されるまでの約五〇年間、古墳の築造が確認されない空白期間が存在することから、狛江古墳群の築造集団に断絶があったと推測している(宇佐美哲也「調査成果と課題」『狛江古墳群猪方小川塚古墳発掘調査報告書』前掲)。これに対して、狛江古墳群の東に近接する喜多見古墳群を、和泉・岩戸・猪方と並ぶ狛江古墳群の一支群として位置づける理解もある(甘粕健「考古学への招待」前掲、寺田良喜「南武蔵における五世紀の変革」菊池徹夫編『比較考古学の新地平』同成社、二〇一〇年)。たしかに、喜多見古墳群の中で最も西に位置する宮之原一号墳(現存しない)は、狛江古墳群の中で最も東に位置する土屋塚古墳や矢崎山古墳(現存しない)ときわめて至近距離にある。また、喜多見古墳群はこれまで砦古墳群に含まれることが多かったが、喜多見古墳群と狛江古墳群が同じ立川段丘面の南東端に所在するのに対し、砦古墳群は一段高い武蔵野段丘面に所在しており、喜多見古墳群と砦古墳群は立川段丘面と武蔵野段丘面の境界を流れる野川(現野川)によって分断されている。さらに、猪方小川塚古墳の石室は、喜多見稲荷塚古墳の影響を受けて造営されたと見られている(『狛江古墳群猪方小川塚古墳発掘調査報告書』前掲、五一頁)。こうした点からすると、狛江古墳群は狛江市から世田谷区にまたがり、喜多見古墳群を狛江古墳群の一支群ととらえることは無理ではなく、狛江古墳群は六世紀半ばに堅穴系主体部を持つ古墳の造営が終焉を迎えた後、その中心は喜多見古墳群に移動し、七世紀第2四半期に至って再び猪方支群に猪方小川塚古墳が築造されたと見ることができ。一つの試案として提示しておきたい。

(31) 喜多見中通南遺跡第四次調査会編『喜多見中通南遺跡』二(二〇〇〇年)。

- (32) 車崎正彦「古墳文化と狛江古墳群」(『新狛江市史』前掲)。
- (33) 寺田良喜「南武蔵における五世紀の変革」(前掲) 三五九～三六〇頁。
- (34) 共和開発株式会社編『弁財天池遺跡 第一次調査報告書』(二〇一〇年)、車崎正彦「律令制の成立と古代の集落」(『新狛江市史』前掲)、『新狛江市史普及版』(前掲)。
- (35) 武蔵国造は天穗日命の後裔を称している(『古事記』神代上、『日本書紀』神代上第七段一書第三)。それに対して、新治国造には美都呂岐命の子の比奈羅布命が任命されたところ(『同』阿波国造条)、新治国造も天穗日命の後裔に当たる。つまり、武蔵国造と新治国造の間には同祖系譜が形成されており、この関係は八世紀以前にさかのぼると推定される。武蔵国造はこうした同祖関係のネットワークも活用しながら、各地の高句麗系渡来人を高麗郡へ集住させたと考えられる。拙稿「武蔵国造と物部直氏」(前掲)。
- (36) 『新狛江市史普及版』(前掲)。なお、城山遺跡(調布市入間町)からは「高大寺」と記された墨書器、染地遺跡(調布市染地)からは京所廢寺(武蔵国府京所地区、府中市宮町)と同一文様の劔菱状単弁蓮華文軒丸瓦がそれぞれ出土しており、これらの遺跡はともに狛江郷の範囲内に比定されることから、狛江郷内には複数の寺院が存在していた可能性がある。十菱駿武「狛江郷と渡来人」(『狛江市史』前掲)、車崎正彦「律令制の成立と古代の集落」(『新狛江市史』前掲)。また、鳥谷知子は「高大寺」が「高麗大寺」の略であるとする説を紹介している。鳥谷知子「東歌・防人歌にみる武蔵」(『学苑・近代文化研究所紀要』九五、二〇二〇年)。
- (37) この地域には佐野屯倉が比定されており、その点でも注目される。須永忍「特別史跡・ユネスコ「世界の記憶」にみるミヤケ」(篠川賢・大川原竜一・鈴木正信編『国造制・屯倉制の研究』前掲)参照。
- (38) 早野浩二「古墳時代の鉄鐸について」(『愛知原埋蔵文化財センター研究紀要』九、二〇〇八年)、狛

- 江市教育委員会編『狛江市文化財調査報告書』三三二(二〇一九年)、車崎正彦「古墳文化と狛江古墳群」(前掲)。
- (39) 亀田修一「列島各地の渡来系文化・渡来人」(吉村武彦・吉川真司・川尻秋生編『渡来系移住民』前掲)。
- (40) 「乃」は「万」の誤記と見られる。
- (41) 菱沼勇「狛江郷と虎柏神社」(『武蔵の古社』有峰書店新社、一九七二年)。
- (42) 十菱駿武「古代の武蔵国と多磨郡」(『狛江市史』前掲)。
- (43) 『続群書類従』二五上所収。
- (44) 『角川日本地名大辞典』三 東京都(前掲)、『日本歴史地名大系』三 東京都の地名(平凡社、二〇〇二)など。
- (45) 拙稿「大神朝臣狛麻呂と武蔵国高麗郡」(『日本古代の氏族と系譜伝承』吉川弘文館、二〇一七年、初出二〇一六年)。
- (46) 『日本書紀』雄略二十年条に、「高麗王大^レ發^レ軍兵、伐^レ尽^レ百濟。爰有^レ少許遺衆、聚^レ居倉下。兵糧既^レ尽、憂^レ泣茲深。於是、高麗諸將、言^レ於王曰、百濟心許非常。臣每^レ見之、不^レ覺自失。恐^レ更蔓生。請^レ遂除之。王曰、不^レ可矣。寡人聞、百濟国者、為^レ日本国之官家、所^レ由来^レ遠久矣。又其王入^レ仕^レ天皇。四隣之所^レ共識也。遂止之。(百濟記云、蓋鹵王乙卯年冬、狛大軍来。攻^レ大城^レ七日七夜。王城降陷、遂失尉礼。国王及太后・王子等、皆没^レ敵手。)」とある。
- (47) 『日本書紀』欽明九年六月壬戌条に、「遣^レ使詔^レ于百濟曰、德率宣文、取^レ婦以後、当復何如。消息何如。朕聞、汝国為^レ狛賊^レ所^レ害。宜共^レ任那^レ策励同^レ謀、如^レ前防距」とある。
- (48) 『日本書紀』欽明十一年四月乙未条に、「百濟、遣^レ中部奈率皮久斤・下部施德灼干那等、獻^レ狛虜

十口」とある。

(49) 『日本書紀』欽明十五年十二月条に、「百濟、遣下部杆率汶斯干奴、上表曰、百濟王臣明、及在安羅、諸倭臣等、任那諸国旱岐等奏、以斯羅無道、不畏天皇、与狛同心、欲残滅海北弥移居。臣等共議、遣有至臣等、仰乞軍士、征伐斯羅。而天皇遣有至臣、帥軍以六月至來。臣等深用歡喜。以十二月九日、遣攻斯羅。臣先遣東方領物部莫哥武連、領其方軍士、攻函山城。有至臣所將來、民竹斯物部莫奇委沙奇、能射火箭。蒙天皇威靈、以三月九日西時、焚城拔之。故遣单使馳船奏聞。別奏、若但斯羅者、有至臣所將軍士亦可足矣。今狛与斯羅、同心戮力。難可成功。伏願、速遣竹斯嶋上諸軍士、來助臣国。又助任那、則事可成。又奏、臣別遣軍士万人、助任那。并以奏聞。今事方急。单船遣奏。但奉好錦二疋、氈氈一領、斧三百口、及所獲城民、男二女五。輕薄追用悚懼。(略)」とある。

(50) 天平宝字五年(七五三)「造金堂所解案」(『大日本古文書』一六一七二九)。

(51) 『続日本紀』天平神護元年(七六五)八月庚申条。

(52) 高麗寺跡が京都府木津川市山城町上狛に所在する。

(53) 『大日本古文書』一五一六五。

(54) 佐伯有清『新撰姓氏録の研究』考証編五(前掲)三三二頁。

(55) 承和十二年(八四五)十二月五日「那賀郡司解」(『平安遺文』一一七三)。

(56) 岩出市山崎の西には、和歌山市上三毛・下三毛・布施屋の地名が残り、布施屋から紀ノ川を挟んで対岸には和歌山市川辺の地名が残る。これらは、紀伊国に設置された経湍屯倉・河辺屯倉(『日本書紀』安閑二年(五三五)五月甲寅条)の比定地とされる。拙稿「紀伊国造の成立と展開」(『日本古代氏族系譜の基礎的研究』東京堂出版、二〇二二年、初出二〇二一年)参照。

- (57) 『平安遺文』 五一―一七九四。
- (58) 森公章「平安・鎌倉時代の国衙機構と武士の成立に関する基礎的研究」(科学研究費補助金基盤研究C研究成果報告書、二〇一二年)。
- (59) 『続日本紀』宝龜元年(七七〇)九月壬戌条に、「又以下天平勝宝九歳、改_三首・史姓_一、並為_中毘登_上、彼此難_レ分、氏族混雜。於事不穩。宜從_二本字_一」とある。
- (60) 『大日古古文書』二五一―一三一。
- (61) 『新撰姓氏錄』大和国諸蕃高麗日置倉人にも「日置造同祖。伊利須使主兄許呂使主之後也」とあり、大和国諸蕃に所載する日置倉人もやはり日置造と同祖で、伊利須使主の兄許呂使主の後裔とする。
- (62) 『日本三代実録』元慶元年(八七七)十二月二十五日辛卯条には「紀伊国那賀郡人右大臣家令兼主殿権允日置首永津・弟掃部少属正八位下日置首今津、賜_二姓菅原朝臣_一。天穗日命之後、与_二大江・菅原・秋篠朝臣同祖也_一」とあり、紀伊国那賀郡の日置首永津・今津が天穗日命の後裔に当たり、大江・菅原・秋篠朝臣と同祖関係にあると主張して、菅原朝臣姓を賜ったことが知られる。しかし、これは日置首永津が右大臣(藤原基経)の家令であったことに対する恩典として実施されたものであり、この時に日置首氏が称した系譜は假冒によるものであったと考えられている。溝口優樹「九世紀における菅原改姓」(『国史学』二二〇、二〇二〇年)。
- (63) およそ七世紀後半以降は、三輪君氏は大神朝臣氏、三輪引田君氏は大神引田朝臣氏と表記される。
- (64) 拙著『大神氏の研究』(雄山閣、二〇一四年)、同『古代豪族 大神氏』(筑摩書房、二〇二三年)。
- (65) ほかに、新羅から到来した天日槍を尋問するために派遣された三輪君祖大友主(『日本書紀』垂仁三年三月条)や、百済と任那の境界を覘るため朝鮮半島へ派遣された三輪君東人(『同』大化元年(六四五)七月丙子条ほか)、新羅からの渡来人を送迎するために派遣された三輪君色夫(『同』大化五

年（六四九）五月癸卯条）などがある。

(66) 『延喜式神名帳』筑前国夜須郡条所載の於保奈牟智神社とされ、現在の大己貴神社（福岡県筑前町弥永）に比定される。

(67) ほかに、崇りをなす大物主神に対して社を建てて祭ったところ、新羅を平定することができたとする伝承がある（『釈日本紀』所引『筑前国風土記』逸文）。また、新羅が常礼を失しているとの報告を遣新羅使から受け（『続日本紀』天平九年二月己未条）、大物主神を祭る大神神社など对新羅外交に効験が期待できる諸社に対して奉幣を行っている（『続日本紀』天平九年（七三七）四月乙巳条）。

(68) この時点ですでに高句麗は滅亡しており、三輪引田君難波麻呂が派遣された高句麗とは、新羅が高句麗最後の宝蔵王の嗣子（庶子あるいは外孫、一説には泉蓋蘇文の甥）に当たる安勝を高句麗王として冊封し、のちに報徳王に任命して旧百濟領内の金馬渚（現在の韓国全羅北道益山市金馬面）に再興した高句麗（小高句麗国・報徳国とも）のことを指す。李成市「六〇八世紀の東アジアと東アジア世界論」〔天津透ほか編『岩波講座日本歴史』二、前掲〕。

(69) 村上四男「小高句麗国の滅亡」〔朝鮮古代史研究〕開明書院、一九七八年、初出一九六六年、拙稿「大神朝臣狛麻呂と武蔵国高麗郡」〔前掲〕。

(70) 荒井秀規は、狛麻呂の養育者が高句麗人であった可能性を指摘している（荒井秀規「渡来人（帰化人）の東国移配と高麗郡・新羅郡」『古代東ユーラシア研究センター年報』一、二〇一五年）。

(71) 拙稿「大神朝臣狛麻呂と武蔵国高麗郡」〔前掲〕。

(72) 寺田良喜は、狛江古墳群の形成によって「狛江地域を含む多摩東部地域は王権が直接支配する地域」となり、それは『和名類從抄』にみられる、後の『屯倉』の前身ともいえるべき直轄地域の獲得の諸段階であった」と述べている（寺田良喜「南武蔵における五世紀の変革」〔前掲〕。筆者もこうした見方に

賛同したが、本文でも述べたとおり、多水屯倉の中心施設は府中地域に置かれており、泊江地域に存在したのは多摩川流域を掌握するための拠点（出先機関）であったと考えている。

- (73) 武蔵国府関連遺跡御殿地区（府中市本町一丁目付近）から、初期の国司館と推定される大型掘立柱建物・竪穴建物が出土していること（江口桂「初期国司館と国府の成立」『古代武蔵国府の成立と展開』前掲、初出二〇一二年）、武蔵国府関連遺跡府中駅南口再開発第二地区（同市宮町一丁目）から多摩郡家で使用されたと見られる硯が出土していること（深澤靖幸「国府のなかの多磨寺と多磨郡家」『国史学』一五六、一九九五年）、武蔵国府第六三五次調査地区（同市八幡町二丁目）から多摩評家関連施設と見られる二棟の大型掘立柱建物跡が出土していること（湯瀬禎彦「古代武蔵国府の成立に至る地域相」『東京考古』三三八、二〇一〇年）などから、近年の発掘成果により多摩評家・多摩郡家に関係する遺物や遺構が発見されている。また、『新編武蔵風土記稿』巻九一「多摩郡巻三 府中領四谷村（現在の府中市四谷）」には「三家」の地名が所載されており、現在は三屋という表記・読みで通りの名やバス停にその名を残すが、かつては「みやけ」と読まれていた可能性がある。この場所は、武蔵国府域の西端に東山道武蔵路・東海東山道連絡路が交わる陸上交通の要衝であるとともに、多摩川・浅川・程久保川が合流する河川交通の要衝でもあった。このことから多水屯倉の中心施設はこの一帯に比定するのが妥当である。拙稿「武蔵の屯倉と渡来人」（高麗浪漫学会編『古代韓半島と東国』前掲）参照。

- (74) 天平勝宝八歳（七五五）「正倉院宝物白布墨書銘」（松嶋順正編『正倉院宝物銘文集』吉川弘文館、一九七八年、三二三頁）、杉本一樹「正倉院の絨維製品と調庸関係銘文」（『正倉院紀要』四〇、二〇一八年）。

- (75) 中林隆之「古代橘樹郡・影向寺遺跡とその史的前提」（『専修大学人文科学年報』五一、二〇一二年）。
- (76) 『続日本紀』神護景雲二年（七六八）六月癸巳条に、「武蔵国橘樹郡人飛鳥部吉志五百国、於同国

久良郡一、獲_二白雉_一「献焉」とある。

(77) 多摩郡の吉士は、飛鳥部吉士を指しているとの説もある。太田亮『姓氏家系大辞典』一八六五頁、森田悌「安閑朝における屯倉設置と渡来人」（『古代東国と大和政権』新人物往来社、一九九二年）。

(78) 青梅市の虎柏神社は江戸時代まで諏訪神社を称し、虎柏神社は相殿として祭られており、明治以降に虎柏神社に改称した。よって、虎柏神社が当初からこの場所に所在したかどうかは定かでないが、参考として挙げておく。

(79) 三輪君氏の系図である『大神朝臣本系牒略』では大神朝臣粕麻呂を「粕麻呂」に作っており、『和名類聚抄』播磨国六粟郡柏野郷を東急本では「粕野郷」に作るなど、「粕」と「柏」は誤写されやすい文字であった。なお、播磨国六粟郡柏野郷について、高山寺本は「柏野」に作り、「加之ハ乃」の訓を振っている。『播磨国風土記』六禾郡条にも「粕野里」とあり、平城宮木簡にも「粕野郷」と見える（『平城宮発掘調査出土木簡概報』一一—一四、『平城宮木簡』二—一九五五）ことから、正しくは「粕野郷」であったことが分かる。

(80) 『新編武蔵風土記稿』卷九十四 多摩郡卷六「府中領 佐須村」の項目。

(81) 『日本地理志料』多摩郡。

(82) 菱沼勇「粕江郷と虎柏神社」（前掲）、三橋健「虎柏神社」（『式内社研究会編『式内社調査報告』一一、皇學館大学出版部、一九七六年）。

【付記】本研究は、JSPS科研費J P 二三K〇〇八五一による研究成果の一部である。